

指摘されているように、グローバル化が進み、中央アジアが旧ソ連外のイスラーム地域と直接間接につながっていく現状を念頭に置くなら、今後はイスラーム研究や中東研究などとのより積極的な議論の接合が求められてくるだろう。ソ連解体後の中央アジア研究の深化によって、中央アジアのイスラームの動態は、近年飛躍的に掘り下げられてきている。そうした観点から見れば、本書は、中央アジア研究とイスラーム研究・中東研究をつなぐ視点・論点の発見のための入門編としても好適の書だといえるだろう。

(帯谷 知可 京都大学地域研究統合情報センター准教授)

ティモシー・ミッチェル (著) / 大塚和夫・赤堀雅幸 (訳) 『エジプトを植民地化する——博覧会世界と規律訓練的権力』 法政大学出版局 2014年 328頁

本書は、Timothy Mitchell, *Colonizing Egypt* (Cambridge: Cambridge University Press, 1988) の邦訳である。本書の訳者あとがきにあるように、本書全体の解説が述べられている序文を所収するペーパーバック版 (1991年) が底本として採用されている。

著者のティモシー・ミッチェルは、歴史学・政治学を専門とする著名な中東研究者である。ミッチェルの勤務するコロンビア大学のウェブサイトから、彼の経歴を簡単に紹介したい。英国生まれの彼は、ケンブリッジ大学クイーンズ・カレッジにおいて、歴史学の学士号を取得した。その後、米国プリンストン大学大学院に学び、1984年に政治学および近東研究の博士号を取得した。同年、ニューヨーク大学に赴任し、政治学の教員としてその後25年間教鞭をとった。同学では、近東研究センターの所長も務めた。2008年にコロンビア大学へ異動し、現在に至るまで中東・南アジア・アフリカ研究科で教鞭をとっている。また、アカデミックな活動のみならず、パレスチナ問題など中東地域の政治問題に関しても積極的な発言をしている。本書以外の彼の主要な著作としては、Timothy Mitchell, *Rule of Experts: Egypt, Techno-Politics, Modernity* (Berkeley: University of California Press, 2002), Timothy Mitchell, *Carbon Democracy: Political Power in the Age of Oil* (London: Verso, 2011) などがある。

Colonizing Egypt は1988年の刊行以降、エジプト研究者のみならず、近代以降の中東を学ぶ者にとって、必読の書とされてきた。エジプト政治を専門とする評者も、研究を始めて間もない頃、本書を手にとった。その時の感想は、「難しすぎて歯が立たない」であった。とはいえ、必読の書を読まないわけにはいかず、何度も挫折しつつ何とか読了した。その際に幾度となく思ったのは、邦訳があればよいのということであった。このような思いをした評者にとって、本書の刊行は個人的にも非常に嬉しいことである。

本書の訳者は、大塚和夫氏と赤堀雅幸氏である。大塚氏は、2009年に亡くなるまで日本における中東研究と人類学を牽引してきた研究者である。また、赤堀氏も同じ研究領域において日本を代表する研究者である。1990年代前半から大塚氏と赤堀氏による訳出作業が続けられ、ついにこの度の刊行へと至った。この両名ほど本書の訳者としてふさわしい研究者はいないと評者は考えており、我々が両名の訳による本書を手に行うことは僥倖である。

本書の主題は、「英国によるエジプト植民地化の歴史の研究ではなく、植民地化する権力の研究」であり、「植民地化の事業が日ごとに進められていくその詳細に目を向け、そうした権力の形而上

学を分析する」ことである (p.vii)。つまり、19 世紀に進められた英国によるエジプトの植民地化の分析を通じて、「今なお広まりつつあるヨーロッパ近代が、いかに特殊な世界と人間の理解の仕方に基礎をおいているかを、「博覧会」「規律訓練」「表象」「見かけ (見せかけ)」といった諸種の概念を駆使して明らかにしているのである」(p.264)。

本書の内容を簡単ではあるが概観したい。本書の目次は次のとおりである。

- 第 1 章 博覧会のエジプト
- 第 2 章 枠づけ
- 第 3 章 秩序の見かけ
- 第 4 章 私たちが彼らの身体を捕らえた後
- 第 5 章 真実の機械装置
- 第 6 章 物の哲学

第 1 章では、「博覧会」を鍵概念として、そこにおける展示として扱われるべき物が現実世界そのものになってゆく過程が検討される。ここでは、第 4 回パリ万国博覧会など、19 世紀のヨーロッパでたびたび開催された博覧会の様子、そしてそこを訪れた中東の人びとの記述を分析し、中東の物や人が陳列物や見世物のように対象物とされていたことを指摘する。ヨーロッパ人の博覧会の展示によって、それら・彼らは体験され調べられるべき対象物として秩序づけられた。

エジプトを植民地化し、それを支配する近代的な権力を確立するためには、それを規定する設計図あるいは枠組みを作成しなければならなかった。「植民地化の過程とは、エジプトが枠づけされた世界として現れるように、新たに秩序化することであった」(p.50)。第 2～4 章では、新式の軍隊の創設、モデル村落の創出、都市計画の策定、学校制度の施行など植民地化の事業が検討され、こうした秩序の方法がエジプトの一部になるまで深く埋め込まれてゆく過程が詳しく考察される。また、19 世紀後半に英国による軍事占領下のエジプトで進められたこのような諸事業によって、人びとの「身体を捕らえ」ということ (p.139)、すなわち規律訓練化が可能となったことが指摘される。エジプトを植民地化する権力は個人の身体の外側に働きかけるだけでなく、個人の精神を形成する働きを持った。規律訓練的な権力は、その対象物を物理的身体と肉体の内にある精神という 2 つのものに区分した。また、物理的な「物」とそれに対応する非物質的構造との区分によって秩序化され分割化された世界に対応するものであった (p.186)。第 5 章では、英国のエジプト占領の議論をつうじて、「政治的な確実性あるいは政治的な意味」(p.23)の問題が扱われ、植民地化する権力による新しい秩序概念や秩序の方法がいかにして意味と権威の領域に効果を及ぼしたのかが検討される。ここでは、言語の問題に焦点が当てられ、通信・印刷技術や学校制度などの新技術が現実とは切り離された構造の効果を創出する様子が描かれる。

第 6 章では、1～5 章の議論が総合的に考察され、次のように結論付けられている。植民地的秩序においては、枠組みが作り出す効果は「概念的構造」、すなわち単なる「物自体」となってしまった何かに先立ち、そしてその背後に存在する、「意味もしくは真実の秩序」として現れる (p.260)。植民地権力による諸事業は全て枠づけ行為として企てられ、観念的なものの領域を表象する効果をもって、「進歩、理性、法、規律訓練、歴史、植民地的権威、秩序といったあらかじめ用意されていた抽象概念を初めて召喚した」。また、政治的権威も同様に、一見したところではあらかじめ存在し優越するものとして存在するが、一度も現前することなく存在するものである (p.261)。

原著の *Colonizing Egypt* は刊行から長い時間がたっており、これまでも多くの書評がある。また、読者諸賢の中にはすでに原著を読んでいる方や、その内容を評者よりも十分に理解している方も多いと思われる。そこで、本稿は本書の内容そのものではなく、評者の専門であるムスリム同胞団研究の視点から若干の解説を加えたい。同胞団とは、1928年に創設されたエジプト最大のイスラーム復興運動である。本書でも、同胞団に関する言及が次のようにある。「ちょうど兵営がそうであったように、学校、大学、印刷物は、植民者の側の規律訓練という方法を、組織化された反抗の手段に転換することで、つねにある種の反乱の中心ともなりえたのである。(その結果が、エジプトのムスリム同胞団のように、第一次世界大戦後にヨーロッパの占領に反対して起こった規律訓練的な政治運動の興隆であり、その指導者たちはほとんどいつでも学校の教師たちだった)」(p.250)。

同胞団の創設者であるハサン・バンナー(1906～1949年)は、西洋近代教育のパイオニアである高等師範学校のダール・アル＝ウルームを卒業し、アラビア語の教師として公立学校に勤務した。彼が創設した同胞団の主な目的の1つは、エジプトを植民地化した英国からの祖国解放であった。1922年にエジプトは英国から独立を果たしたが、それは名目的なものに過ぎず、彼が同胞団を結成した当時も英国の植民地権力がエジプトを支配し、植民地的秩序は現存していた。本書の読了後にバンナーの論考を読み返すと、彼が植民地権力による「枠組み」がもたらした結果を認識していたことがうかがえる。彼の論考「クルアーンの旗下にあるムスリム同胞団」では、次のようにある。

現状への無関心、イスラーム諸国家の幻想、贅沢と享楽への耽溺の中で、横暴で強力なうねりと破壊的で強力な「西洋の」潮流が、思慮深い「イスラームの」知性よりも優勢であったことを我々は認める。「西洋の」諸原則と唱導が確立され、規則と哲学が明示され、文明が形成された。これら全ては、その息子たち「ムスリム」の胸中で、イスラームの思想と競合した。イスラームの地の中心へこの「西洋」諸国が侵攻し、あらゆる所からムスリムを包囲し、ムスリムの国土、家、部屋へ押し入った。そして、ムスリムの心、知性、聖地までも占領した。彼らは誘惑、扇動、力、権威を獲得する準備ができていた。それは、ムスリムが事前に準備できなかったものである [al-Bannā 1996: 107–108]。

そして、別の論考「新たな局面における我々のダアワ」では、次のようにそれへの対処を訴える。

人びとは、教宣(da'wa)の実践的な諸現象や多様な形式に注目する。しかし、教宣を支える栄養となり、勝利や拡大「の有無」が左右されるにもかかわらず、その精神的な動機や霊的な直覚力への視点をほとんど無視している。教宣の研究から離れた者や、その根底にある理由の探求をやめた者以外は、異論を唱えられないであろう。諸現象の背後に全てがあるとすれば、教宣の中にこそ、その動機となる精神があり、それを動かし、支配し、推進する内的な力がある。このような魂・精神・意識の真の覚醒なくして、国家が成立することは考えられない [al-Bannā 1996: 126]。

この2つの引用からうかがえるのは、英国当局の諸政策によって植民地化されたエジプトに新たな秩序が埋め込まれていたことを、バンナーが理解していたということである。そして、英国による植民地支配から脱却するために、イスラームの教えに基づく教宣によって、彼は植民地化する権

力による秩序概念や秩序の方法を解体しようとしていたともいえる。近代的な高等師範学校で規律訓練的な教育を受けたバンナーは、その経験を同胞団という組織作りに役立てた。同胞団においては、組織運営において規律訓練が重視され、勤勉なメンバーが多く創出された。この人的資源における強みが、20世紀前半における同胞団の急速な発展の一因であった。植民地権力のつくった秩序の枠内で、バンナーは教育を受け、同胞団は誕生・発展した。この意味において、同胞団は植民地主義の産物のひとつであると位置づけることも可能であろう。このように、本書は一見関係なさそうな同胞団という研究対象についても、新たな視点を与えてくれる有益な書である。

原著の刊行からすでに20年以上が経過しているが、その内容は決して色あせておらず、本書は今なお重要な「古典」として必読の書である。原著は、日本語以外にも、アラビア語、ドイツ語、ポーランド語、トルコ語へ翻訳されており、世界で幅広く読まれている。このことから、本書の重要性がうかがえる。繰り返しとなるが、エジプト研究のみならず、中東研究の必読書である *Colonizing Egypt* の邦訳が完全な形で出版されたことは僥倖である。本書に初めて触れる方はもちろん、すでに原著を読了済みの方々もこの本書を読み返していただきたい。必ずや、この名著から新たな発見をえることであろう。

<参考文献>

al-Bannā, Ḥasan 1996. *Majmū'a al-Rasā'il al-Imām al-Shahīd Ḥasan al-Bannā*, Alexandria: Dār al-Da'wa.

(横田 貴之 日本大学国際関係学部准教授)

小杉泰・林佳世子(編)『イスラーム 書物の歴史』名古屋大学出版会 2014年 472頁

「ムスリムはクルアーンしか読まない」という偏見は少なくなった。ムスリムが書いた様々な書物も和訳されている。しかし、それらの和訳が、ヨーロッパや中国の書物の和訳ほどに読まれているとは言えない。イスラームに関する事柄を研究する者にとっても、約1400年の長い歴史と、東・東南アジアからアフリカ・ヨーロッパに至る広範な地域で展開した、ムスリムの書物文化の全体を通観する機会は多くはない。「イスラームの書物」(本書2頁)の歴史を、人類の書物の歴史の重要な一部として、7世紀のイスラームの到来からデジタル化が進展する今日まで通観しようとする本書は、一般読者に「イスラームの書物」の豊かな世界を紹介し、研究者には、日々の研究で扱う文献が、どのような書物文化の一部であるのかを認識させてくれる。また、書物の内容だけでなく、文字や紙、写本の装丁といった、内容を伝えるモノに注目していることも興味深い。

本書は3部で構成され、冒頭に、小杉泰による「はじめに 光は東方から——文字と書物の水脈」が置かれる。ここでは、本書全体の目的、すなわち、グーテンベルグ(1468年没)による活版印刷の「発明」を画期とする西洋中心的な書物の歴史に対して、活版印刷の導入は遅れたものの、豊かな写本文化が展開した「イスラームの書物」の歴史を解明することで、グローバルな視点から人類の書物の歴史に対する視野を拡張することが語られる。

この目的を踏まえて、第1部「イスラーム文明と書物文化の隆盛」は、預言者ムハンマド(632年没)の時代からアッバース朝前期(8～10世紀)までを中心的に扱う。ここでは、クルアーンのウ